

平成31年度（令和元年度）

岩手大学教育学部附属
教育実践総合センター

活 動 報 告

ご 挨拶

日頃より、岩手大学教育学部の教育研究活動にご理解とご支援を賜りまして、大変ありがとうございます。平成31年度（令和元年度）の本学部の地域連携活動の概要を記した小冊子の刊行にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

岩手大学教育学部及び大学院教育学研究科は、平成28年度にそれぞれ大きな改組を行いました。学部では、生涯教育課程と芸術文化課程の2課程を募集停止とし、学校教育教員養成課程のみの学部となりました。また、大学院教育学研究科は、従来の修士課程としての学校教育実践専攻と教科教育専攻を募集停止とし、専門職学位課程としての教職実践専攻、いわゆる教職大学院となりました。この改組を一言で表現するならば、学部も大学院も、教員養成に特化した組織体制へと大きくシフトするための改組を行ったと言えます。この平成28年度からの学部と大学院の改革は、カリキュラムから教員組織体制や学生指導体制に至るまで大きな改革となりましたが、お陰様で改組4年間の経過を経て、ようやく安定してきたところです。ただ、この4年間は、平成28年度からの大きな改組を順調に遂行させることに勢力を注ぐ必要があったために、教育学部の地域連携事業の在り方に関しては、十分に検討する余裕がなかったということが実情です。教員養成の専門学部としての教育学部と高度専門職業人としての教員を養成することを使命とする教職大学院として、一体どのような地域連携活動を行うことが必要であるのか、またそれはどのような組織体制で実施したらいいのかということについては、今後検討していく予定となっています。

本冊子には、平成31年度（令和元年度）に教育学部が取り組みました地域連携事業の概要が記されています。ただ、本冊子には含まれてはいませんが、教育学部および教職大学院の教員の多くは、教員免許状更新講習の講師、各種の教育研究会の講師、各地の校内研修会の講師や助言者としても幅広く活動しています。教育学部（教職大学院）の教員が行っている地域連携活動をどのように集約し公表すべきかについても、今後検討したいと考えています。

以上のように、教育学部（教職大学院）の地域連携活動の内容やその公表の在り方につきましては、今後検討を加えて行く予定でありますので、何かご要望やご意見などありましたら、遠慮なくお寄せいただければ幸いです。最後に、岩手大学教育学部（教職大学院）にこれまで以上のご理解とご支援をお願いしまして、ご挨拶とさせていただきます。

令和2年3月

岩手大学教育学部

学部長 遠 藤 孝 夫

I. センター組織体制

本センターは、平成28年度の学部改組、教職大学院新設に伴い、専任教員体制から兼任教員体制へと変更し、それに合せて業務内容も大きく見直すことになった。また、学部教員の減少に伴って各教員の多忙化が進んでおり、本年度はさらに事業を縮小することになった。

所在地：〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18-33

電話：019-621-6686（事務室） FAX：019-621-6600（事務室）

センター長（兼務）	教授	塚野 弘明	6642 (tsukano@iwate-u.ac.jp) 【学校教育】
兼任教員	准教授	佐々木 全	6814 zensky 【教職大学院・特別支援教育】
兼任教員	准教授	田中 成行	6546 naritana 【国語教育】
兼任教員	准教授	中村 好則	6863 nakanori 【数学教育】
兼任教員	准教授	岩木 信喜	6663 iwaki 【学校教育】
兼任教員	准教授	白石 文子	6567 fumikos 【音楽教育】
兼任教員	准教授	菊地 洋	6518 hkikuchi 【社会科教育】
客員教授	教授	川上 圭一	6686 kawakami

※（ ）内のアドレスでは [a@iwate-u.ac.jp] を、電話番号では局番 [019-621] を省略しています。

II. 教員研修事業

(1) 現職教員研修会の開催

令和元年度教員研修会

日 時：令和元年6月22日（土）13：15～15：15

場 所：岩手大学教育学部北桐ホール

講 話：「岩手の教員に期待すること」

講 師：岩手県教育委員会事務局教職員課首席経営指導主事兼小中人事課長

今 野 治 氏

(2) 学校臨床支援事業

事業名：令和元年度 不登校児童生徒にかかわる個別相談会

事業主催：盛岡市教育委員会

目的：各校の不登校児童生徒支援に関し、対応や指導の在り方について協議し、回復への方途を探る。

内容：盛岡市上田公民館会議室を会場に、各小学校および中学校の担当者（1～2名）、市教委担当（2名）、本学教育学部山本奨教授の三者による事例検討を行った。

日 程：令和元年10月16日（水）

10月17日（木）

実績：4校（小学校2校、中学校6校）の9事例について検討した。

(3) 地域との連携事業

1. 競技力向上支援事業（担当者：清水茂幸）

①世界陸上支援事業

世界陸上競技選手権大会（ドーハ）での成功を目指し、強化競技者を中心に大会・合宿等で指導および助言

○8月6日～8月18日 世界陸上における合宿支援（千歳）

○9月22日～10月7日 世界陸上における大会支援（ドーハ）

②岩手陸上競技協会（日本陸連共催）の強化事業における支援事業（11月21日～27日及び1月20日～27日 宮崎）

2. スーパーキッズ支援事業（主催：岩手県）・・・担当者：清水茂幸・上濱龍也（大学院生・学部生と共同で）

①チャレンジ1及びチャレンジ2の運営（11月～1月毎週末）

②スーパーキッズスペシャルスクールを運営するための指導及び助言（毎月第1、第3土曜日に行うスペシャルスクールのサポート）

③夏期、冬期における研修合宿のサポート（8月及び1月）

Ⅲ. 学生派遣事業

(1) 地域教育実習

岩手県の学校教育の特徴である小規模校や複式を有する学校において教育実習を行うことによって、小規模校をとりまく地域の実態や課題、学校と家庭や地域とのつながり、小規模校の教育の特質とその役割、複式授業の実際、小規模校における教師の仕事と子どもの実態などに対する総合的で実際的な見識を養う。

日程及び実習先等

葛巻町 9月25日（水）～27日（金） 参加学生15名

引率教員：阿部、山崎、佐藤（由）

25日 江刈中学校 授業参観 授業実践 授業研究会

26日 地域体験実習 町内一周継走見学 教育長講話

27日 小屋瀬小学校 授業参観 授業実践 授業研究会

(2) スクールトライアル

県内の連携大学（岩手大学，岩手県立大学，富士大学，盛岡大学）に在籍する教員志望の大学生を学校に派遣し，学校における様々な活動を支援するとともに，大学生に対して実践経験の場を提供することで，学校教育に関する理解を深め，教員になるための意識の高揚を図る。

派遣先 盛岡市，花巻市，北上市，特別支援学校

参加学生 前期 32 名，後期 13 名 合計 45 名（延べ人数）

(3) ボランティアチューター

ボランティアチューターは，学生による学校体験と学校支援を目的とした大学と 3 自治体（矢巾，紫波，雫石）が共同で実施する事業（自治体によって名称が異なる）としてはじまった。しかし，学部改組にともなう副免許の取得の義務化や 100 分授業の開始などで学生の空きコマ数が減り，通常の講義期間中に派遣することが難しくなった。

現在は，矢巾町教育委員会と連携し，中学生の基礎学力向上のために，学生の長期休暇などを利用して矢巾中・矢巾北中へ学生を派遣し，学習支援を実施している。

実施教育委員会：矢巾町教育委員会

ボランティアチューター	
1. 参加学生数	
矢巾町（名称：ラーニングサポート）	
	派遣人数 (通年，前期のみ，後期のみ)
矢巾中	10 人（通年 1，前期 4，後期 5）
矢巾北中	14 人（通年 2，前期 7，後期 5）
合計	24 人（通年 3，前期 11，後期 10）※
※上記は両校参加者を含む延べ人数。プログラム参加者は 15 名 ※今年度は，教育学部以外に，理工学部 1 年生 3 名と農学部 1 年生 1 名が参加	



ラーニングサポートの様子（2020年2月13日 矢巾中）



(2020年3月 広報やはば より)

(4) 放課後学習支援事業（盛岡市立仁王小学校）

平成29年度より、教育学部と実習協力校である仁王小学校では、地域連携コーディネーターに中心となっただき、放課後学習支援への学生派遣を実施している。

事業の目的

仁王小学校並びに岩手大学がよりよい連携を図り、事業を展開することにより、下記の具現化を図る

児童 学習意欲の喚起及び基礎的・基本的な内容の定着

大学生 教員としての資質と指導力の向上及び教員採用・教育実習に向けた事前学習及び事後学習支援内容

「放課後学習」での学習支援活動（プリント、ドリル等の丸付け、巡回指導等）

基礎的・基本的な内容の定着が不十分な子どもへの個別支援

実施時間

放課後30分程度（15時以降、学年により異なる）

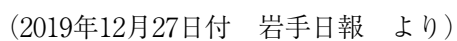
派遣実績

6月	7月	10月	11月	12月	1月	2月
15名	9名	4名	0名	0名	5名	4名

※6月は仁王小学校学校公開準備も含む

(5) 地域連携一学生派遣依頼

奥州市では、文部科学省の地域学校協働活動推進事業の予算を用いて、冬休み期間中、山間部に位置する胆沢愛宕地区の中学生が自由に学習し交流するための『地域未来塾』が企画・実施された。岩手大



(6) 2019年度スクール・インターンシップ・プログラム

山崎友子、ホール ジェームズ

〈はじめに〉

山崎担当部分では、定期的に学校を固定して勤務体験をする Type A と単発的な訪問により国際理解に貢献することを目的とする Type B のインターンシップを提供している。岩手大学で学ぶ留学生の実際の地域社会での体験的学習の機会となり、さらに、日本人学生がその補佐役を務めて、国際理解の実際を学び、コーディネートする能力を養うことを目指している。多くの留学生は、後期から岩手大学での学習を開始するため、後期に Type B を設定し、留学に慣れた前期に Type A を設定することを基本とした。

〈参加者〉

	前期	後期
教員研修留学生		パブロ カバレロ (スペイン)
交換留学生	Satra Usanee, Krasai Songwut, Chantharaintorn Didsarin (タイ), Matthew Jackson, Morgan Southworth, Natalie Frazier (米国), Xing Tang (中国), Jocelyn Permatasari, Anwar Ibrahim (インドネシア)	コルディエ サーシャ、レスケフラビ (フランス)、ボンダレン エリザベータ (ロシア)、ナッタモーン ピョバゴーン、パンクム ピーチャ、パウオンサイヤ シット パラウイー (タイ)、チャンドラ トリスナティ、ペルマタサリ ジョイセリン (インドネシア)
学部・院正規生	3 名	5 名

〈活動の種類別受入れ先〉

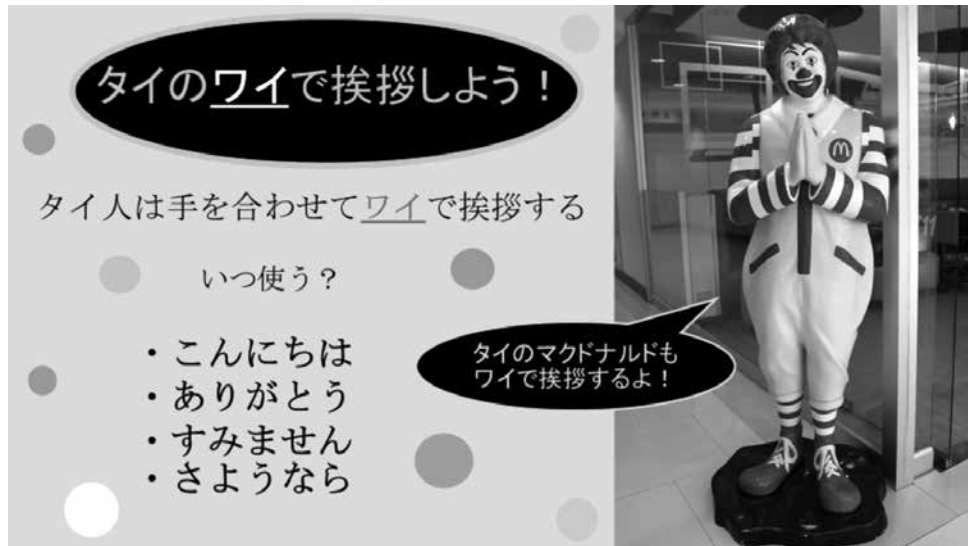
	Type A	Type B
前期	盛岡市立城東中学校 (英語 ALT)、盛岡市立城西中学校 (英語 ALT)、岩手大学教育学部附属中学校 (英語 ALT)	岩手県立盛岡第一高校・岩手県立水沢高校 (高校生の SGH 事業による発表会参加)、株式会社ニュートン見学、じゃじゃ T V 海外の料理紹介
後期		盛岡ゾンタクラブ (日本語スピーチコンテスト参加)、遠野市見学と観光名所案内の翻訳、遠野中学校訪問授業、宮古市立田老保育所 (英語教室)

〈活動の内容と成果〉

1. 地域の学校との連携

前期に履修した米国からの留学生 3 名は、中学校で英語の ALT を務めた。前年に引き続き受入れていただいた盛岡市立城東中学校 (千田幸範校長)、盛岡市立城西中学校 (三浦裕明校長)、教育学部附属中学校には、留学生を温かく迎えていただき、留学生は日本の学校教育における英語教育を ALT として体験させていただいた。後期は、遠野市立遠野中学校 (小向敏夫校長) において、留学生が自国紹介を日本語で行った。前年の盛岡第一高等学校での経験から、PPT を用いて、途中に 3 択クイズを取り入れ、日本人学生とのインターアクションを豊かにする工夫をすることにより、中学生に興味を持って聞いてもらうこ

とができた。盛岡第一高等学校では、スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）事業におけるグループ学習の成果発表会に参加し、質問・感想を述べる機会を得た。また、遠野中学校では、自国紹介の他に、出身国でよく知られている民話も紹介し、異文化ではあっても、それぞれの文化に共通する普遍的な要素があることも互いに学ぶことができた。受け入れていただいた学校の先生方に、ここに記して感謝申し上げる。



分かりやすく、惹きつけられるパンさんのスライド（遠野中学校での自国紹介）

2. 日本語スピーチコンテスト参加

2017年度から、ゾンタクラブ盛岡支部（女性の活躍を支援する国際組織）の依頼を受け、外国人による日本語スピーチコンテストに参加している。今年は8名6組の留学生が参加し、2位・3位にあたる賞を得た。タイのナッタモンさんのスピーチのタイトルは「タイで一番人気のあるお菓子の名前は“京都”」というもので、日本人はタイトルだけで興味をそそられる。スピーチを聞くと、タイと日本の関係やタイの中高生の日常生活がわかった。何よりも、にこやかな話しぶりに惹きつけられるスピーチであった。

スピーチ原稿の完成やりハーサルでの練習を手伝った日本人学生にとって、スピーチという形で知る異文化は、留学生の人柄とともに心に残るものとなった。スピーチコンテストでスピーチを聞いての感想の一部を紹介する。

私がスピーチを聞いていて多くの国の文化や人間性、日本の文化を多面的に捉えたものを学ぶことができた。特に日本人に対しての諸外国の考え方には驚いた。日本人はシャイで自分のことだけを考えているという見方は改めて考えさせられた。その第一印象を受けて実際に関わってみると日本人の良い人間性に触れたと聞いた時、日本人の特徴に気づいた。それは他人に干渉することが失礼なものだと考え、自らは関わることに躊躇するがそれから関わるうちに思いやりの心や気遣いを行うことである。これはグローバルな視点からは非積極的な点として捉えられるが、その反面で人と人の関わりの中で重要な信頼や長い目で見た人間関係の持続という良い面もあると、今回スピーチコンテストで気づかされた。自国と日本との比較をスピーチで聞くことにより客観的に日本のことを考えることができたことは本当にいい経験だった。

今回スピーチコンテストに参加させていただいて、本当にあらゆる面で勉強になった。異文化理解の面やスピーチ技術の面で特に勉強になった。この経験を私自身の学習や近い副実習、教員採用試験に生かしていきたいと考える。このような機会を用意していただいた方々、素晴らしいスピーチをしてくださった留学生の方々に感謝してこれからも努力をしていきたいと思う。(教育学部3年 山崎颯太)

3. 会社見学

岩手県には外国人を雇用したり、海外に工場を持つ会社がある。タイに工場を持つ株式会社ニュートンを、タイと中国からの留学生が見学した。田面木哲也社長に案内役を務めていただき、貴重な助言をいただいた。なんとなく翻訳者を希望している学生には、専門分野を持つようにとの助言をいただいた。また、学生の質問に、「難しいこと、他の会社にはできないことを選んで、それができるようにする。誰でもできることができる、というのでは、必要とはされませんよ」という答えが返ってきて、学生は身の引き締まる思いがした。訪問後、下記の感想があった。

Afterwards, in free questioning time, I told the president that such a highly developed mechanization and robotization factory was very efficient and decreased a large number of labor forces. He replied helplessly: due to the social phenomenon---serious deficiency of young workmen in Japan gave rise to a huge shortage of labors. Therefore, it was in hurry to improve the production methods. If it was this case, the heavy social problem that everybody realized, on the other side, had greatly contributed the industrial revolution as a direct factor. In contrast, shall “gradually aging” China have pondered more careful about how to make breakthrough? (Xing Yang)

4. 遠野市観光名所の翻訳

「遠野」は日本語学習者にとってあこがれの地である。遠野研修旅行を実施し、遠野中学校での交流授業の他、昔話の里を訪れた。大学に戻り、心に残った観光地を紹介する文章を日本語と自国語で書き、遠野市観光課に送った。遠野市のHPやSNSのインバウンドの声として活用される予定である。



『遠野物語』の中にカッパの話があります。遠野市の常堅寺裏を流れる小川の淵にはカッパが多く住んでいて、人々を驚かせていたと言われています。そのため、常堅寺裏の小川の淵は、カッパの伝承地「カッパ淵」として有名になりました。

“カッパおじさん”がガイドをしてくれます。おじさんはカッパ伝説の継承人とされていて、今のおじさんは3代目です。このおじさんの説明を聞くと、あなたが4代目カッパおじさんです！

5. 田老保育所の英語教室

10月30日と12月18日、ホールとスクール・インターンシップ・プログラムの正規大学生が、宮古市立田老保育所（狩原志代子 園長）を訪ねた。10月30日にハロウィーンをテーマにした英語教室を開いた。子供たちと学生が変装をしながら、ハロウィーンの単語（ghost, witch, pumpkin, wizard, mummy, monster, broom, vampire, bat）を取り入れた歌を歌ったり、ゲームをしたりした。スクール・インターンシップ・プログラムを履修している3年生の山崎颯太がハロウィーンの物語の読み聞かせを行った。

12月18日に、田老保育所のクリスマス会に参加した。ホールがサンタを演じ、子どもたちにプレゼントを配った。学生は、クリスマス会の手伝いと英語教室の講師を行った。英語教室が終わった後、子ども達と一緒に食事会に参加した。英語教育科では、2011年以来、田老保育所で英語教室を行っており、来年度も、継続する予定がある。

	
ハロウィーンの読み聞かせ	田老保育所が作ったクリスマス会の感謝状

6. TV 番組への出演

じゃじゃじゃ TV からの依頼を受け、海外の料理紹介番組で、インドネシアと米国からの留学生がそれぞれの国の料理紹介を行った。

〈おわりに〉

例年、地域の教育活動に岩手大学学生が関わり、学生にとり教育現場から学ぶ貴重な機会となり、大学にとっても地域の教育機関との連携により、互いの関係を深める機会となっている。今年は、学習のフィールドを学校から地域の文化や経済活動を直接見る場へも広げた。

留学生と日本人学生のペア活動により、互いを知ることに加えて、将来教員となる教育学部の学生にとって、地域の国際化が進む中で教員に必要なことを体験的に学ぶインターンシップの機会となることを願っている。

Ⅳ. 生涯学習支援事業

(1) 花巻市出前講座

事業名：令和元年度岩手大学教育学部出前講座

事業主催：花巻市

目的：本学が有する高等教育機関の能力を活用した生涯学習講座を開設し、もって、花巻市民の豊かな人間性を育て、まちづくりに資することを目的とする。

内容・日程・実績：下の表のとおりであった。また、本年の共通テーマは「気になる？入門講座アラカルト」であった。

実施日	テーマ	担当教員	参加人数
11月21日(木)	【1時限目：社会】 地域の歴史って何？ 近現代史のなかの岩手	社会科教育科 今野日出晴 教授	27
12月3日(火)	【2時限目：理科】 ホヤの目はどこにある？ 三陸の名産ホヤのお話	理科教育科 梶原 昌五 准教授	23
12月17日(火)	【3時限目：情報】 インターネットってどれだけ危険？ 最新の情報セキュリティ技術	技術教育科 吉田 等明 教授	27
1月17日(金)	【4時限目：英語】 翻訳はひと味違う？ 原文で味わう英文学	英語教育科 境野 直樹 教授	15
1月30日(木)	【5時限目：心理学】 「学習」するって何？ 知識の力を実感しよう	学校教育科 岩木 信喜 准教授	22

(2) 盛岡市市民対象公開講座

令和元年度学びの循環推進事業（専門コース）への講師派遣について

- ①令和元年5月26日 第26回世直し大学（於：大慈清水お休み処）

講演タイトル「憲法って何だろう ～今、改めて憲法と立憲主義を考える～」

派遣講師 社会科教育 菊地 洋 先生

- ②令和元年7月18日 憲法カンファレンス（於：アイーナ6階）

講演タイトル「立憲主義とは何か」

派遣講師 社会科教育 菊地 洋 先生

- ③令和2年3月20日 岩手パソコン要約筆記サークルあいたっち 令和元年度研修会

（於：岩手県立視聴覚障がい者情報センター）

講演タイトル「憲法と人権～あなたもわたしも大切に～」

講師派遣 社会科教育 菊地 洋 先生

岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要投稿規定

1. 研究紀要の名称

岩手大学教育学部附属教育実践総合センター（以下、「センター」）は、研究紀要を原則として年1回発行する。研究紀要の名称は、「岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要」（以下、「研究紀要」）とする。

2. 編集

- (1) 「研究紀要」の編集は、研究紀要編集委員会を設置して行う。
- (2) 研究紀要編集委員会は、「センター」兼務教員3名をもって構成する。
- (3) 「研究紀要」の原稿の募集、採択、掲載の順序、及び体裁などについては、研究紀要編集委員会において決定する。

3. 内容

「研究紀要」の内容は教育実践・教育臨床に関するものとし、未公開のものに限る。掲載種別は、次のとおりとする。

- (1) 論文：原則として教育実践・教育臨床に関する理論的または実証的な研究成果（事例研究を含む）など。
- (2) 報告：教育学部・「センター」の研究プロジェクト報告、実践報告、調査報告、事例報告など。
- (3) 資料：未加工の資料の紹介など。

4. 執筆者

「研究紀要」に投稿できる者は、次に該当する者とする。

- (1) 岩手大学教育学部及び教育学研究科専任教員（附属学校を含む）。
- (2) 「岩手大学教育学部附属教育実践総合センター規則」に定める「センター」客員教授。
- (3) 研究紀要編集委員会が特に認めた者及び依頼した者。

5. 執筆要項

執筆要項は原則として教育学部研究年報「原稿作成の手引き」による。

6. 投稿字数

投稿字数は28,000字、刷り上がり16ページまでとする。原則2段組とする。（原稿及び電子ファイルは1段組で提出する。）

7. 別刷

別刷は、その費用を執筆者負担とする。カラー印刷は別途、自己負担とする。

8. 原稿締切

原稿の締切は、原則として2月15日とし、締切期限後に提出されるものについては受理しない。締切日が土曜日または日曜日の場合は、翌週の月曜日とする。なお、投稿希望者は、電子ファイ

ル（USBメモリなど）を添えて編集委員会に提出するものとする。

9. 電子公開

「研究紀要」に掲載された論文、報告、資料は岩手大学リポジトリを通してweb上で電子公開される。紙による冊子体での発行は行わない。電子公開に伴う著作権の関係は次の通りである。

- (1) 「研究紀要」に掲載された著作物の著作者は、複製権及び公衆送信権の利用を「センター」に許諾する。
- (2) 「研究紀要」に掲載された著作物は、著作者自身で再利用することができる。

〔説明事項〕

1. リポジトリ登録

岩手大学リポジトリで電子公開を行うとは、「研究紀要」に掲載された著作物を電子化して書誌情報を付加して岩手大学リポジトリのサーバに登録し、web上で公開することです。

登録されたコンテンツは永久保存され、無料で誰でもアクセスできます。

2. リポジトリ登録に伴う著作権の範囲

- (1) 「センター」が譲渡を受ける著作権は、電子公開に必要な複製権と公衆送信権に限るものとします。

これらの権利によって岩手大学は冊子体を電子化し、あるいは提出された電子ファイルをサーバに保存するために複製して、電子データを不特定多数に送信し公開することができます。

- (2) 「研究紀要」に掲載された著作物を著作者自身がまとめて刊行するなど再利用することは、これを妨げるものではありません。
- (3) 「研究紀要」に掲載されたあるいは今後掲載される著作物に含まれる楽譜、画像やプログラム等は電子公開にあたって権利関係の問題を生じさせない措置を著作者自身がとって下さるようお願いいたします。

電子公開の許諾が得られない著作物が公開されることはありません。

また電子公開された著作物の利用にあたっては、原則として著作権者に承諾を得なければなりません。ただし、私的使用目的での複製や引用など、著作権法で定める権利制限規定の範囲内の利用については、著作権者に許諾を得る必要はありません。

(2016年7月30日改訂)

平成31年度（令和元年度）編集委員会（A B C順）

・田 中 成 行

・中 村 好 則

岩手大学教育学部附属教育実践総合センター

発 行 日 2020年 3 月31日

編集・発行 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター

代表者 塚野 弘明

〒020-8550 岩手県盛岡市上田三丁目18-33

☎ 019（621）6686

永代印刷株式会社

〒020-0857 岩手県盛岡市北飯岡一丁目8-30

☎ 019（636）0011 FAX 019（636）0099